

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第1室	①	小学校外国語専科教員制度の現状と課題 —小学校管理職・行政職担当者への調査をもとに—	俣野 知里	京都教育大学附属桃山 小学校 (京都府)	研究	本研究は、小学校外国語専科教員制度の現状と課題について、小学校管理職・行政職担当者を対象とした調査から明らかにすることを目的とした。調査から、専科教員による指導が一定の効果を上げていると捉えられている一方、勤務条件に起因する課題は、校内で改善することが難しい状況が示唆された。また、複数の自治体で、専科教員の孤立感の軽減を主な目的とした情報交換会が、ICTを活用して試みられていることも明らかになった。	東 仁美
	②	家庭学習が英語コミュニケーション能力に 及ぼす影響 —小学生の異文化経験と保護 者のかかわり—	田中 佑美	滋賀大学	研究	本研究は、家庭学習と動機づけが英語コミュニケーション能力へ及ぼす影響を異文化経験の有無別に検討した。その結果、小学生の家庭学習は、保護者から学ぶ家庭学習と経験的に学ぶ家庭学習に分類され、家庭学習の英語コミュニケーション能力への影響は異文化経験の有無により異なっていた。海外経験がある場合は経験的な家庭学習が、海外経験がない場合は保護者から学ぶ家庭学習が、英語コミュニケーション能力に影響を与えていた。	
	③	教室内英語力評価尺度 (小学校版) の開発 ～総合的診断尺度に焦点を当てて～	中田 賀之 池野 修 木村 裕三	同志社大学 愛媛大学 富山大学	研究	本研究は、小学校英語教員の専門的技術の向上の意識高揚に資する「教室内英語力評価尺度」を開発し、その尺度活用を通じた小学校外国語授業改善と担当者の成長を目指す。本発表では、「教室内英語力評価尺度 (中高版)」開発の経験者及び小学校教員協力者による「教育現場・授業」「中高版尺度」「理論」との3つの対話を経て開発された「教室内英語力評価尺度 (小学校版)」の1つである「総合的診断尺度 (Ver. 1)」について報告する。	
第1室	④	授業分析の手法を用いた外国語科授業の比較 ～授業者のピリーフが授業・児童にどの ような影響を与えるのか	白鳥 金吾 志村 昭暢	北星学園大学短期大学 部 北海道教育大学	研究	外国語科の授業が教科化され、全国で様々な形態での授業が展開されている。近年は学級担任以外の教員が外国語科の授業を担当するケースも増えているが、彼らの英語指導経験や言語教師としてのピリーフが多様であると考えられる。本研究では、2名の外部講師が主導する外国語科授業について、授業分析の手法により授業の特徴を明らかにすると共に、教師の指導経験等の違いによる学習者の情意面への影響についても考察する。	酒井英樹
	⑤	外国語科と国語科の連携の試み —「語の まとまり」に注目して—	西垣 知佳子 本多 君枝 橋本 修 安部 朋世 神谷 昇	千葉大学 船橋市英語指導員 筑波大学 千葉大学 千葉大学	研究	発表者らは、JES課題研究 (2019-2020) で、小学校での外国語科と国語科の連携の一例として、「語のまとまり」という文法概念の学習指導を提案した。本発表では、国語の知識と連動させ、小学生に「名詞を中心とする英語の語のまとまり (名詞句) を見つける力」を育てる授業を実践した。その結果、英語の「語のまとまり」の理解が深まった。また、be動詞を含む文は、一般動詞を含む文よりもまとまりを捉えにくいこと等がわかった。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第2室	①	小学校外国語科デジタル教科書における語彙分析	本田 勝久 染谷 藤重 佐藤 裕子 小川 一美	千葉大学 京都教育大学 船橋市教育委員会 京都女子大学	研究	本研究では、2020（令和2）年4月から使用されている小学校外国語科検定済教科書のデジタル版に出現する語彙を分析した結果を報告する。具体的には、1) 検定済教科書7社分（計14冊）に記載されている語彙とそれぞれのデジタル版に出現する語彙との比較、2) これまでの小学校英語教材での使用語彙との比較、そして、3) デジタル教科書の語彙データから受容的活動と産出的活動での語彙を分類した結果を報告する。	池田 周
	②	小学校「外国語科」における音声指導項目の考察～学習指導要領解説、検定教科書を参照にして～	羽尾 将司	関西大学大学院(学生)	研究	本発表では、はじめに、小学校ならびに中学校の新旧「学習指導要領解説」における「音声」に関する項目を整理し比較したものを紹介する。次に、小学校「外国語」全出版社の教科書において、音声項目がどのような形で提示されているのかに関して分析を行った結果を紹介する。最後に、教科書の特徴を教員が理解し、実際にどのように小学校において音声指導を行うことができるのか、音声教育研究の知見から提言を行う。	
	③	ローマ字学習後のフォニックス学習が英単語の読み書きに与える影響ーローマ字の影響による英単語の読み書きのつまずき測定尺度の開発ー	岡本 小枝	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所・松戸市教育委員会	研究	英単語の読み書きのつまずきの理由として、文字と音の関係（フォニックス）がわからないこととローマ字の影響が考えられる。それらの関連を調べる為に、ローマ字の影響による英単語の読み書きのつまずき測定尺度を開発し、ローマ字学習後にフォニックスを学んだ生徒と学ばなかった生徒を比較した。その結果、ローマ字学習後のフォニックス学習が、ローマ字の影響による英単語の読み書きのつまずきを減らせている可能性が示された。	
第2室	④	小中連携を語彙の側面から検討する：小学校語彙リストの中学校検定教科書に対するカバー率から	佐藤 剛	弘前大学	研究	本研究は小学生の学習語彙が中学校1年生用検定教科書のテキストをどれくらいカバーするのか（カバー率）を調査した。AntWordProfilerを使い、小学校のための受容語彙リストに含まれる語彙の中学校1年生用検定教科書に対するカバー率を測定した。その結果、200語レベルのカバー率が50%程度であること、小学校で学習するべき語彙数である600語～700語のカバー率は60%～70%であることが明らかになった。	福原史子
	⑤	小学校中学年の英語語彙知識を予測するモデル構築	金山 幸平	北海道教育大学	研究	本研究では、小学校3年生と4年生を対象に、30問から成る「音声→意味」選択テストを実施して、中学年の語彙知識を予測するモデルを構築し、そのモデルが未知データを正しく予測できるのかを検証した。予測モデルによって算出された未知データの予測正答率と、未知データの実際の正答率の間には強い正の相関係数が観察された。従って、本研究で構築された予測モデルは未知データを精度良く予測できることが明らかになった。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第3室	①	Can-Doリストを活用した授業改善の試み～指導者は何を指導し、どんな変容を見取るのか～	阿部 巧 根岸 清人	厚真町立上厚真小学校 苫小牧市立明野小学校	実践	中学校、高等学校においてはCan do リストを使った授業実践が普及してきているが、小学校においては手探りの状況である。研究の結果、①Can doリストを使った実践は児童、指導者の双方にプラスである。☑ ②スレッドシートなどを活用することで、単元の授業設計や、Can do評価に使うためのワークシートを簡単に作ることもできる。☑ 以上の2点について発表する。	アレン玉井 光江
	②	低学年英語活動における活動設計とCan-Do評価：ふり返りから見る児童の傾向と成長	大江 太津志	京都市立百々小学校	研究	低学年児童が英語活動でふり返りを書くことで、内省を習慣化しメタ認知の発達を促すことができるのではないかと考え、授業実践を重ねた。その際、Can-Do評価を用いた児童用内省シートを使い、自由記述の視点を児童に提供しよう留意した。年間を通して児童がどのように発達・変容したかを探るため、1年分（3単元・15時間）の児童のふり返りを分析し、低学年児童のメタ認知の傾向や年間を通じた発達について考察した。	
	③	思考・判断・表現を見取る5領域の指導と評価ー小学校外国語検定教科書の特徴を踏まえてー	泉 恵美子 長沼 君主 山川 拓 幡井 理恵	関西学院大学 東海大学 京都市立九条塔南小学校 昭和女子大学附属昭和小学校	実践	本発表では、検定教科書7社の分析結果を踏まえ、評価の3観点（特に「思・判・表」）を培う活動設計とCan-Do/パフォーマンス評価の開発試案、話すことの授業実践例を紹介する。その際、目的・場面・状況を設定し、課題達成のために児童が思考を働かせ、表現につなげられるような工夫や、ルーブリックを共有し教師の発問により発表内容を深められるような働きかけ、技能統合的な活動を通じた段階的な見取り等を紹介したい。	
第3室	④						
	⑤						

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③10:20～10:50 ④11:00～11:30 ⑤11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第4室	①	小学校における英語学習開始時に児童が有する英語の文字の知識 私立小学校1年生児童を対象とした実態調査	小竹 空翼	啓明学園初等学校	研究	東京都の私立小学校1年生26名を対象に、英語の文字の知識をどの程度有しているかを明らかにするための実態調査を行った。本調査では、文字の形、文字の名称、文字の表す音の知識を測定するために、5種類のタスクを実施した。それぞれのタスクの得点や、文字別の正答率等をもとに、小学校での英語学習開始時における英語の文字の知識の習得状況を考察する。	佐藤玲子
	②	小学生にとってどのアルファベット文字を書くのが難しいのか -潜在ランク理論を用いた検討-	澁谷 裕子 森田 光宏	前東京家政大学大学院 院生 広島大学	研究	本研究の目的は、アルファベットの文字指導前に、小学生が、どの文字が書け、どの文字が書けないのかを明らかにすることである。4年生に大文字を、5年生に小文字を書かせ、得られたデータを潜在ランク理論の枠組みを用いて分析した。その結果、大文字は3グループ、小文字は4グループの難易度グループに分けることができた。指導の際には、難易度の高いグループに属する文字群により丁寧な指導が必要だろう。	
第4室	③	英語指導における四線ノートの工夫：「X-height部分」のハイライト効果の検証	小野 祥康	北海道科学大学	研究	四線ノートの第2線（ミーンライン）と第3線（ベースライン）の間にハイライトをつけることの効果を調べるため、小学校6年生を対象に、アルファベットの大文字・小文字を四線上に正しく書く課題と、例文を正しく書き写す課題を2回実施した。1回目は通常の上線が印刷された用紙を、2回目は対象児童をランダムに2群に分け、それぞれ通常のものと同様にハイライトがついたものを用いた。本発表では、その結果について報告する。	伊藤摂子
	④	小学校外国語教科化に伴うアルファベット指導のあり方-6年児童を対象とした調査より-	佐藤 裕子	東京学芸大学連合大学 院・船橋教育委員会 (千葉県)	研究	本研究の目的は、6年児童への調査を通して大文字・小文字それぞれの正答率やつまずきを明らかにして、教科化に伴うアルファベット指導のあり方について検討を行っていくことにある。調査の結果、大文字の正答率74%小文字の正答率が62%で、つまずきやすい文字の特徴として「似た文字の混同」「大文字・小文字の混同」「アルファベットの順番のまちがい」などが分かった。今後の課題では、児童の実態に焦点を当ててどう指導していくのか提示していく必要がある。	
	⑤						

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第5室	①	英語で「言いたい！」力を育てる単元構成及び授業展開の研究～これからのグローバル社会を生きていく子どもたちへ	村山 恭子	さいたま市立美園北小学校 (埼玉県)	実践	昨年度まで勤務していた、さいたま市立大戸小学校では、全校挙げてグローバル・スタディ科の研究を6か年続けた。特に、児童が「もっと話したい」授業、「これからも自分で学び続けたい」学習が「生き生きとコミュニケーションを楽しむ授業」に結び付くと考えた。また、ALTとのTeam Teachingを効果的に進めるためにはどのような方策があるのか、単元構成と授業展開例を児童アンケートと合わせて提案したい。	山本玲子
	②	英語の授業のわかる・できるはどこから来るのか～小学2年生と3年生の振り返りシートを比較して～	物井 尚子	千葉大学	研究	2020年度より、小学3、4年生に対して外国語活動が開始され、小学5、6年生に対しては英語が教科化された。本研究では、研究対象を小学2、3年生(それぞれ103名と95名)という低学年に絞り、授業中の振り返りシートからL2 WTC、L2によるコミュニケーション能力の認知(L2 Perceived Competence)の学年による差異を明確化することを目的とする。このことは、今後、小学校において自己評価の一環として多用される振り返りシートの有効活用を提案するものである。	
	③	Parental Influence on Children's English Learning –Using Self-Determination Theory (SDT) Framework–	田中 晶子 竹内 理	関西大学大学院 関西大学	研究	The present study examines parental influence on elementary school pupils' English learning motivation. Two hundred twelve parent-child dyads participated in this study. Based on the hypothesis, structural equation modeling was conducted. Results indicate that children's perception of parental involvement affects positively both children's perceived competence and interest in other countries, in turn enhances their English learning motivation.	
第5室	④	小学校における学級別の「英語が好き・嫌い」の考察 K市の英語授業アンケート調査の結果から	清水 万里子	三重大学 (非)	研究	過去に調査をしたアンケートで女子児童が「英語が嫌い」と回答しており、理由欄には「グループにふざける男子がいて楽しくない」と書かれていた。筆者は小学校における英語教育では、授業の雰囲気や児童の「好き・嫌い」に少なからず影響しているのではないかと考えている。大規模調査によると小6生の約8割が「英語が好き」なのだが、実際のところ学習集団(学級別)によって差はどのくらいあるのか明らかにする。	松本祐子
	⑤	日本の小学生児童のWTC, Intrinsic Motivation, Anxiety, 英語運用能力の変化～アウトプットの機会に接した児童に焦点をあてて～	大野 直子	昭和女子大学大学院 博士前期課程	研究	リーディング、リスニング中心のインプット学習に焦点を置いた学校外英語プログラムで英語を学ぶ日本の小学生と、その中でアウトプットの機会に接した児童のWTC, Intrinsic Motivation, Anxiety, 言語運用能力の関連と変化を調査、分析を行う。 その結果、短期であってもアウトプットの機会に接することを通して、WTCを上げ、そのことがリスニング・リーディングの英語運用能力を上げることにも影響を与えることが判明した。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第6室	①	An ALT's Narrative Inquiry as a Reflective Practitioner	王林鋒	福井大学	研究	This study explores an elementary school ALT's narrative inquiry based on his professional learning in a M.Ed. program in Japan. It attempts to examine the structures of the M.Ed. program and its impacts on ALT's professional development. The ALT's reflective writings and oral sharing during reflective meetings are used to unfold his narrative inquiry of English teaching and learning.	新井謙司
	②	小学校外国語担当教員の資質能力基準及びポートフォリオの開発	前田 康二	奈良教育大学	研究	小学校外国語教育の開始時期の早期化、高学年での教科化への対応、ICT活用の必要性の増大や児童の多様化など学校の変化の中で、今後の日本の小学校外国語担当教員に求められる資質能力を明らかにし、その評価基準、及び省察ツールとしてのポートフォリオを開発することを目的とする。これらの試行的な開発及び教員研修を通じた運用を行い、定性的、定量的に評価を行ったところ、新たな資質能力やそれらを評価する仕組みが必要である可能性が示唆された。	
	③	教員の自己肯定感を育む、実践的な教員研修の在り方ー総合的参与観察に基づく校内教員研修プログラムの試みー	松本 由美	玉川大学	研究	小学校における外国語指導の校内研修は、第二言語習得の過程の特異性に根差した指導の新奇性にばかり目が行きがちだが、現職教員の指導経験に専門的知識つまり理論を付加することにより、即時的に実践に生かすという理論と実践を架橋する役割を果たすものである。本発表は、これに基づき発表者が2020年4月より行っている、現職教員の自己効力感を育みつつ、外国語指導法の即時的な実践に結び付ける教員研修の試みの中間報告である。	
第6室	④	小学校外国語教科化に伴う課題と学級担任に必要な支援についてー杉並区でのアンケート調査の結果からー	折井 麻美子	早稲田大学・杉並区教育委員会	研究	本研究では、外国語活動が教科化された初年度と翌2021年1学期に「外国語科」を担当した学級担任を対象に、杉並区内の全48小学校でアンケート調査を実施し、授業運営（TTでの役割と単独での授業内容、デジタル教科書の使用、評価方法）の現状と課題について調査した。学級担任が抱える指導と英語力上の課題を明らかにし、教科化直前の調査結果と比較するとともに、外国語科指導のために必要な研修とその形態について提案する。	中田葉月
	⑤	英語教育改革元年における英語の教科化・低学年化に対する小学校現職教員の意識調査ー教員の不安軽減・授業実践力向上を目指してー	國分 有穂	昭和女子大学	研究	本研究は、小学校英語の教科化に対して、小学校現職教員はどのような不安を抱いているのか、また教科化の前でその不安感がどのように変容しているのかを明らかにすることを目的とする。英語教育改革の前2年間に、東京都内の外国語指導経験のある小学校教員195名を対象として、自由記述式も併用した多岐選択式の質問紙調査を実施した。 質的分析の結果、多くの教員が、指導面においては、ALTとの連携やALTとの打ち合わせ時間の確保、評価方法に不安感や負担感を抱いていることが明らかとなった。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第7室	①	小学校外国語科用文部科学省検定済教科書の分析－文字と音の関係に関する内容を焦点に－	上原 明子	都留文科大学	研究	本研究の目的は、文字と音の関係に関する内容が、小学校外国語科用文部科学省検定済教科書においてどのように取り扱われているのか、それぞれの特徴を整理することである。どの教科書も学習指導要領に基づき文字と音の関係を取り扱っているが、個々の文字が表す子音や母音に関する活動の内容の充実度にはかなりの差が見られた。さらに、音韻認識を高める活動を取り扱っているものもあり、各教科書会社の特徴が見られた。	内野駿介
	②	小学校外国語科用検定教科書とWe Can!の比較分析－4技能の言語活動の視点から－	白土厚子	東京学芸大学	研究	本発表は、現在使用されている7社の外国語科用検定教科書を2020年度から全面実施された学習指導要領の目標(2017)の具現化として作成された移行期用共通教材We Can!(2018)と比較しながら、目標に掲げられている「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動」が5・6年生の教科書でどのように扱われているのかを分析し、言語活動を通して児童のコミュニケーションの基礎となる資質・能力をどのように育成できるかを探る。	
	③	小学校外国語検定教科書の分析－「聞くこと」「話すこと(やりとり)」「話すこと(発表)」を中心に－	松延 亜紀 竹田 里香 樫本 洋子	関西学院大学(非) 立命館大学 四天王寺大学	研究	2020年度から新学習指導要領に基づいた検定教科書が高学年で使用されている。採択の多かった3社の教科書を取り上げ、小学校外国語教育の要である「聞くこと」「話すこと(やりとり・発表)」に焦点を当て、それぞれの教科書の使用音声の特徴や活動内容を分析した。その結果、各教科書に明らかな特徴があることがわかった。さらに指導者のアンケート調査の結果を踏まえ、真の言語活動を促し、児童の学びを深める工夫の提案を行う。	
第7室	④	令和二年度版小学校外国語科教科書における活動の技能別分類	星野 由子 清水 通	千葉大学 東北学院大学	研究	本研究の目的は、小学校外国語科教科書における活動を技能別に分類し、評価との連携を検討することである。教科書分析の結果、合計活動数は、読む活動62、書く活動276、聞く活動1882、話す活動(発表)887、話す活動(やりとり)399であった。最も多かった種類の活動は聞く活動で、写真や絵を選ぶ問題(515活動)であった。この結果から、児童がどのような活動に教科書を通して触れているのかが明らかになった。	中住幸治
	⑤	外国語科・小中連携の一考察－語彙レベルにおける小中外国語科の教科書分析－	土屋 佳雅里	東京成徳大学	研究	2021年4月に中学校外国語科(以降、中学校英語)検定教科書が改訂された。小学校での外国語(英語)の学びが、いかに中学校以降の英語の学びに繋がっていくかが非常に重要である。そこで、小中連携の現状および課題を検討するために、中学校1年外国語科教科書の小中を繋ぐページといえる本文前Unitを、先行の外国語科教科書分析の研究結果と併せ、語彙レベルに焦点をあてて分析し、考察していく。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第8室	①	小学校高学年児童の英語スピーキングに関する実態調査	西原 美幸 松宮 奈賀子	広島大学附属小学校 広島大学	研究	本研究は、日本人小学生の英語スピーキング能力の実態を調査・把握し、今後の指導法改善に活かすことを目的とする。この目的を達成するために、週2単位時間、小学校で一般的に教えられている内容に基づいた英語授業を受けた高学年児童128名を対象に、自分自身に関する紹介や簡単な英語でのやりとりについて分析した。身近な場面で起こりうる発話について対応することができる力が育っているが、現在とられている暗示的な指導法では児童が自分自身で気づくことができない誤りに特徴があることがわかった。	畑江美佳
	②	目的に応じて伝える内容を整理、形成するプロセスの指導 - 話すことと聞くことを組み合わせて -	乗富 智子 滝沢 雄一	金沢大学附属小学校 金沢大学	実践	ある程度まとまった量の英語を話す活動では、話す前の伝える内容の形成において、子どもが自ら、目的、場面、状況などを考慮できるように指導する必要があると思われる。本発表では、小学校6年生を対象として、聞く活動と話す活動を組み合わせながら、目的に応じて伝える内容を整理、形成するプロセスの指導を取り入れた単元「This is our school. わたしたちの学校」での授業実践について報告する。	
	③	英語で「話すこと」における「知識・技能」のパフォーマンス評価 - 小学5・6年生の学年間比較 -	江口朗子	名古屋女子大学短期大学部	研究	本研究では、小学生の英語で「話すこと [やり取り]」における「知識・技能」の持続性を調査した。5・6年生計142名が、台湾の小学校からの転校生と英語でパソコンに向かって会話をするバーチャル体験をした。専科教員ら2名がタスク7項目を6尺度のルーブリックで「知識・技能」の観点から評価した。4項目は学年間で有意差がなく、3項目は5年生の方が有意に高かった。結果に基づいて、スパイラルな学びの重要性に言及する。	
第8室	④	小学校「外国語科」の授業に於ける児童の自由度のある発話の研究 - スモールトークとALTとのZoomセッションの分析から -	居村 啓子 本好 利彰	拓殖大学 勝田台小学校 (千葉県)	研究	本研究は公立小学校「外国語科」の授業9回に於ける、6年生児童の発話の自由度を検証した。10名の児童のスマールトークと、ALTとのZoomセッションを分析した結果、それぞれ回数を追うごとに発話量が増え、徐々にやりとりがスムーズに行えるようになった。また定型表現に留まらず、自由度のある発話へと発展した。オーセンティックな言語活動を設定することで、多様なコミュニケーション方略を使うようになることが示唆された。	巽 徹
	⑤	「CROWN Jr.」を用いた授業づくり- 目的・場面・状況を意識した「話すこと(発表)」の実践報告 -	小林 哲也	小山小学校 (長野県)	実践	外国語の教科化1年目を終えて、発表者が勤務する長野県須坂市の小学校で子ども達にどのような(変化)成長が見られたのかを、子ども達の話すこと(発表)にフォーカスして紹介する。当日は、授業計画案やビデオをもとにしながら、成果と課題について発表する。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前の部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第9室	①	小学校教員養成課程の大学生の言語教育観の分析 ー意識するのは言語の「意味」か「形式」かー	三好 徹明	関西国際大学	研究	本研究の目的は、小学校教員養成課程の大学生の言語教育観の分析を試みることである。小学校教員養成課程の大学3年生(2019年度入学, 102名中98名回答)に対して、小学校外国語の授業における、以下の5つの質問を行い、5件法で回答を得た。形式に関する質問(音声, チャンク, 文法)と意味に関する質問(日本語での理解, 英語での理解) 小学校教員養成課程の大学生は、小学校外国語の授業では「形式」に関しては音声に最も注意を払っているものの、総じて、日本語の「意味」や英語の「意味」を意識しており、チャンクや文法など「形式」に対しては、「意味」よりも意識していないことが分かった。	立松大祐
	②	初等教育教員養成課程の大学生の小学校英語指導に対する自己評価の変化 ー「小学校英語指導法」の授業を通してー	渡邊 政寿 大場 浩正	上越教育大学 上越教育大学	研究	本研究の目的は、初等教育教員養成課程に学ぶ大学3年生を対象に、「小学校英語指導法」の授業を通して、小学校で英語を教えるための知識や指導技術に対する自己評価がどのように変化してきたかを調査するものである。授業の事前・事後調査として、4技能の指導など75項目(26カテゴリー)について自己評価(5段階)してもらった。結果として、「児童の自律」と「授業展開」のカテゴリーにおいて大きな伸びが認められた。	
	③	アイアーンの国際協働PBLを通じたグローバル・コンピテンス育成の試み	坂本 ひとみ 滝沢 麻由美	東洋学園大学 東洋学園大学	実践	21世紀を生きる力を獲得するためには、グローバル・コンピテンスの育成が不可欠であり、CLILを用いた英語教育はそれに寄与できると考える。世界の小中高生がオンラインによって国際協働学習をするNGOであるアイアーン(iEARN)を通じてSDGsに関するPBLを行う場に、児童英語教育課程の大学生も子どもたちを支援するために参画させ、グローバル・コンピテンスの芽生えの可能性を探った実践研究である。	
第9室	④	外国語指導法授業でのユニバーサルデザインを目指した文字・音韻指導とジョリーフォニックス紹介による指導意識への効果	安達 理恵	桐山女学園大学	研究	2020年度から外国語が教科となり、小学校教員を目指す学生には特に児童がつまづきやすい文字や音韻指導を丁寧に行うことが求められる。そこで「外国語の指導法」の授業では教職課程学生にユニバーサルデザインを目指した、①文字指導、②音韻指導、③外部講師によるジョリーフォニックスのオンラインワークショップを導入した。発表では授業概要と、学生の省察コメントから指導意識にどのような効果があったかを述べる。	佐々木雅子
	⑤	パターンを用いたSmall Talkの指導実践研究	西川 光子 大野 恵理	紀北教育研究所 三重大学	実践	松香フォニックスの3Aを応用し、小学校教員が負担なくSmall Talkが指導できる方法を提案する。児童がSmall Talkを行う様子を録画・記録し、その変化を調査した。その結果、英語の苦手な児童はスムーズに自分の思っていることを英語で言えるようになり、英語の得意な児童は、ジェスチャーや思いを詳しく言うなど、話す内容を膨らませることができた。3Aの指導により様々なレベルの児童がSmall Talkができる技能を習得できると推察できる。	

第21回 小学校英語教育学会(JES) 関東・埼玉大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表 10月10日(日) 【午前部】 ① 9:00～9:30 ② 9:40～10:10 ③ 10:20～10:50 ④ 11:00～11:30 ⑤ 11:40～12:10

教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第10室	①	小学校外国語活動・外国語科におけるTPR原理を用いた 外国語学習コンピュータ・プログラム活用の提案	黒川 愛子 中野 研一郎	帝塚山大学 関西外国語大学	研究	本研究では筆者らがTPR原理を応用して開発した外国語学習コンピュータ・プログラム（以下、本CP）を小学校外国語活動・外国語科においてどのように活用し、どのように児童の4技能（5領域）の向上と主体的な学びに結び付けられるかの提案を行う。特に、検定教科書及びデジタルテキストに加え、本CPを用いて学習を行う際、いかなる利点があるかについて、指導手順と学習語彙・構文を中心に比較を行った結果を報告する。	古家貴雄
	②	英語教科化によって生まれた授業設計に関する問い -英語コミュニケーション力に着目して-	大槻 友紀	明治大学大学院	実践	研究の目的は、教科化における小学校英語の授業設計の変化を、教師の省察を通して明らかにすることである。特にコミュニケーション力を育成するためのスピーキングや発表活動に焦点を当てる。教員の授業の記録や対話を通して省察した記述、98名の児童の振り返りを分析した。活動において教員の意図は児童に概ね支持されていた。同時に複雑なニーズや捉え方があることも明らかになった。	
	③	複式学級における外国語「完全一本案」に基づく実践 -「聞くこと」の学力調査-	大野 恵理	三重大学	実践	三重県南部のA教育委員会管内すべての複式学級では2018年度より、2学年分の単元を1年間で学習を圧縮して構成し、2年間繰り返す「圧縮版年間指導計画」に基づいて外国語を指導している。2020年度に管内すべての第6学年が英検Jrを受験し、単式学級（52名）と、複式学級（14名）の得点に統計的な有意差はなく、「圧縮版」に基づいての指導で外国語の「聞くこと」については学力保障ができていると考えられる。	
第10室	④	小学校英語教育におけるAI導入の可能性	中村 典生 秋山 巧磨 荒井 研一 小林 透	長崎大学 長崎大学大学院生 長崎大学 長崎大学	研究	指導要領に初めて人工知能（以下AI）のことが言及されたことからわかるように、教育現場では今後AIとどう向き合うかが問われている。本研究は、児童との対話が可能なAIを製作し、それを小学校英語教育の現場に導入することによって、担任教員とAIが相補的な関係を築き上げ、より効果的な教育を創造しようとするものである。本発表では実際に現場にAIを導入した際の様子を示し、その際のアンケート結果をもとに、AIの導入可能性について論じる。	物井尚子
	⑤	英語学習における児童のつまずきに対する教師の認知 専科教員及び学級担任を対象とした調査結果の分析	中山 晃 大谷 みどり 村上 加代子 川合 紀宗 松宮 奈賀子	愛媛大学 島根大学 甲南女子大学 広島大学 広島大学	研究	英語の指導を担当する教員（学級担任及び専科教員）の勤務年数や英語指導経験が、児童の英語学習におけるつまずきの認知にどのような影響を及ぼしているか調査し、その結果から、各教員属性にあった指導上の留意点を見出すことを目的とした。結果、いわゆるベテランの教員と勤務年数の少ない教員では、児童の「つまずき」に対する認識が異なる可能性が示されたことから、属性に応じた適切な研修が望まれることが示唆された。	